



Title	『今業平昔面影』における考証随筆と西鶴作品の利用
Author(s)	樋口, 純子
Citation	詞林. 2024, 75, p. 15-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95126
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『今業平昔面影』における考証随筆と西鶴作品の利用

樋口 純子

はじめに

笠亭仙果作『今業平昔面影』(歌川芳虎・国輝画、嘉永三年(一八五〇)―六年(一八五三)刊、和泉屋市兵衛板¹⁾(以下、『今業平』)は、七編二十八巻で構成、刊行され、そのうち五編二十巻が現存する合巻である。書名に「今業平」とあることから、『伊勢物語』を利用した合巻であると考えられるが、そもそも『伊勢物語』を利用した合巻に関する研究はこれまでされておらず、主に研究の対象となつたのは、作者不詳の仮名草子『仁勢物語』(寛永末年(一六四四)頃刊)や上田秋成の滑稽本『癪癪談』(二巻二冊、寛政三年(一七九一)成立か、今津屋辰三郎ら三都五肆板)など、いわゆる「もじり」の方法を用いた小説のほか、井原西鶴の浮世草子『好色一代男』(天和二年(一六八二)刊、荒砥屋孫兵衛可心板)、柳亭種彦の読本『浅間嶽面影草紙』(三巻三冊、蘭齋北嵩画、文化六年(一八〇九)刊、後編は「逢州執着譚」の題

で五巻五冊を同九年(一八一二)刊、山崎平八板)や『綴手摺昔木偶』(五巻五冊、柳川重信画、文化十年(一八一三)刊、山崎屋平八板)などの読み物であった。合巻については中村幸彦が東里山人の『風俗伊勢物語』(天保六年(一八三五)初編刊)、笠亭仙果の『今業平昔面影』、立亭光彦の『鄙物語業平双紙』(安政元年(一八五四)初編刊)の三作品が『伊勢物語』を利用したと示しながらも、これらの作者は「短編の歌物語を、如何にして長編の筋の物語に化するかを嘆じている。全く異質の合巻物の中では、『伊勢』はその本来の文学性を全く捨てて、部分的素材を提供するのみで終つてい²⁾る」と指摘しており、これまで研究されることがなかった。しかし、合巻は近世期の小説のなかでも最後の方に位置するジャンルであり、『伊勢物語』を利用した合巻を研究することは、江戸時代全体を通して『伊勢物語』の受容の変遷を考える一助になる。まずは『今業平』を取り上げたい。

『今業平』は主人公の玉川千之丞が、生みの親の義理を果

たすため、盗まれた短刀とそれに添えた小倉色紙を探す旅を描いた作品である。この「玉川千之丞」という名は実在した女形の歌舞伎役者から名づけられている。全体を通して『伊勢物語』の和歌や内容を利用しているのが見られるが、所々に作者未詳の『今昔物語集』（説話集、平安後期成立）や『浄瑠璃御前物語』（御伽草子、室町中期成立）も引用している。また、口絵や挿絵には『傾城浅間嶽』（歌舞伎、伝中村七三郎作、元禄十一年（一六九八）初演）を彷彿とさせる挿絵や、鈴木春信や喜多川歌麿の浮世絵の見立て図にも用いられた『琴高仙人』が描かれている。つまり、複数の先行作品を利用したことで、長編化を可能にした。

『今業平』研究の目的は、先行作品をいかに利用したかを考察することであるが、笠亭仙果に関する研究がまだ少ないことから、まずは『今業平』以前に刊行された仙果の合巻を分析してその制作態度を明らかにし、『今業平』をいかに形作ったかについて考察したい。

なお、『今業平』の引用に際しては、翻刻したものに適宜句読点、濁点、「」を補った。また、作品の引用文中、振り仮名は影印のままとし、割り書きは「」に入れた。傍線についてはすべて引用者が付したものである。

一 仙果の合巻における制作態度——『今業平』までを中心に——

笠亭仙果（文化元年（一八〇四）生）の著作について初めてまとめた石川了は、その著作活動を四期に分類した。第一期は天保元年（一八三〇）まで、第二期は柳亭種彦の門下生となった天保二年（一八三一）から弘化三年（一八四六）まで、第三期は弘化四年（一八四七）から文久元年（一八六一）まで、そして、第四期を二代目柳亭種彦と名乗った文久二年（一八六二）以後とした。仙果が初めて合巻を出版するようになったのは、種彦の門下生になったまさに天保二年からであり、それから嘉永三年までに二十六種の新作を出版した。また、初編以降の続編も含めると、『今業平』が出版された第三期には計五十四冊百四編もの数を出版するなど、『今業平』刊行時の制作活動はかなり活発化していた。

仙果の戯作に対する考え方については佐藤至子が合巻『白縫譚』（万延二年（一八六一）刊、柳下亭種員遺稿）の序文を引きながら要約しているが、合巻における制作態度について言及した先行研究は少ない。本節では『今業平』以前に刊行された合巻のうち、制作態度について言及した序文を参照しながら明らかにする。

仙果が合巻を制作し出してから天保七年（一八三六）までに刊行された八種の合巻全てを種彦が校閲し、そのうち四種

の合巻の序文を種彦が書いていた。仙果自身が合巻制作に對して初めて言及したのは『柳蔭古着新鄺』（天保十年（一八三九）刊、山本平吉板）である。そこには

機関の仕掛手妻の種。見たがるは見物の人情なり。草冊子さへ今時のお子達はざつと読まず。有た事か又嘘か。翻案か剽窃か。此一酌は忠臣蔵此脚色は水滸伝にありなど穿鑿の。微細なる時節としりつつ昔の淨瑠璃小説引直さねばさうもさうも。新に趣向は立がたけれども僕ごときはありふれたる種をとつて仕掛が拙ゆゑ。ことにどなたの御眼にも。見透く續のギヤマンにて。尻のわれるに殆ど困り。さらばいつそのあたまでから某本の筋を借受作ましたと打明て。先其原書の要を摘み。首に記して其次に。本文を御覽にいれたら。正直でまだよからうかと。（第二）

とあり、『柳風花白波』（嘉永二年（一八四九）刊、和泉屋市兵衛板）には、

戯作の道亦是に似て。故人の作を剽窃するより。好ものを見て。旧案改題が骨も折れず。看人も面白く。争読ば必売れて非られながら賈主の利市。得財は作者の威光となれば。恥辱を愧ぬが戯作者魂。（二編）

とある。二つの序文から、仙果は「翻案」を「つくりかへ」たもので、「剽窃」を「きりぬき」と捉えており、後者については否定的であることを述べ、本文が始まる前に利用した

先行作品を先に示すことも述べている。また、『牡丹園娘莊子』（嘉永三年（一八五〇）刊、藤岡屋慶治郎板¹⁰）では、

未冬邯鄲諸国物語栄久堂に彫せしかば序にこにも胡蝶の夢招牌で久しく御見物おまたせ申た申訳師に代て作よとなり題名汚すはあるまじき変とは思へと辞むも本意なく彼随筆なる牡丹の考証所々に抜書して拙作に花を飾お最良への愛形とす（初編）

と、作中に牡丹の専門書である木陳居士の『紫陽三月記』（元禄四年（一六九一）刊、大和屋十左衛門板）を引用したことを述べている。この考証の利用という点において先行研究では、仙果と三亭春馬との合作『店三絃緒連弾』（天保九年（一八三八）刊、西村屋与八板）が庄司勝富の写本随筆『異本洞房語園』を典拠にしたこと、加えて仙果の随筆『与志奈志言』（文政十年（一八二七）—慶応三年（一八六七）の記述）が師である種彦の考証随筆を利用したことを長田和也が指摘している。

仙果の合巻における制作態度の一端を見たところで、次に『今業平』においてこの制作態度が当てはめられるのかについて確認したい。『今業平』初編序文には

都雅なる男子を見て、光源氏^{みけん}在五の君と評するは世上の口癖。然有勢語を種として君に擬すべき男は誰ぞ。西鶴叟^{さい}が一代男、彼物語に倣ふとなしに世之助といふ者を設て、一期の盛衰奇話多し。此を彼に撮号してと

腹稿粗成ければ、甘泉堂の今年の新版を出してか
 があらんと云のをききて、突然も有む。よさはよけれど、
 町風は極意でなくては味不美。拙工には猶大将鬻時
 代。そなたも田舎の育、師匠の由縁、紫に贖る方が作
 にも易く、賣にも勝手と琴柱に膠動かぬ當りを希ふも
 宜也。（以下略）

とあり、ここでは『今業平』の主人公を『好色一代男』の主
 人公世之介になぞらえたこと明らかにしている。『今業平』に『伊
 勢物語』を俗化した『好色一代男』を利用したことは至極當
 然のことと思われるが、十七世紀後半に活躍した西鶴の作品
 が十九世紀以降の戯作者に受容されていたことは見過ごせな
 い。種彦は自身の作品に西鶴の作品を投影し、西鶴が活躍し
 た元禄時代の風俗を研究し考証随筆に取り入れたことや、仙
 果は西鶴に関心を寄せる戯作者のネットワークに存在して
 「西鶴本や自筆稿本の貸与と筆写」をし、種彦同様に仙果自
 身の考証随筆（『なるの日並』、『於路加於比』）に活かしたこ
 とが既に指摘されている。加えて仙果が合巻に考証の成果を
 取り入れたという先例があるために、『今業平』においても
 考証随筆の利用を考慮することが必要である。

以上のことから、本稿では『好色一代男』の世之介になぞ
 らえた主人公の名前を、なぜ実在した歌舞伎役者「玉川千之
 丞」に設定したのか、また、『好色一代男』を利用していか
 に「翻案」つくりかへ」たのかの二点について、西鶴作品と

考証随筆の利用という観点から考察する。

二 主人公「玉川千之丞」の設定理由

本節では、『今業平』の主人公を「玉川千之丞」とした理
 由について考察する。まず、仙果は序文で次のように述べて
 いる。

…船を刻て探る劔ぬけ出たる趣向もなければ、注文ま
 せに案を立改、再彼此物の本見て目つけたる昔の優
 人右近源左衛門 玉川千之丞。源左衛門は中将の事な
 らねども、海道下り、千之丞は業平に打扮ねども、河内
 通、共に久しき大當。且、いづれも彼君に譬し評語は
 野郎蟲卜養の狂歌集抄録ねども、皆御存じ。そこで狂
 言作者の所謂南無三寶で二個の中さも有さうに假用せん
 と撰べば、源左は勁々し千之丞ぞ似つかはしきとこれに
 定て（以下略）

「玉川千之丞」の他にもう一人実在した歌舞伎役者、「右近
 源左衛門」も選択肢にあったこと、右近源左衛門は『海道下
 り』、玉川千之丞は『河内通』と、それぞれ狂言で大当たり
 した女形だが、結局仙果は玉川千之丞が相応しいとして主人
 公の名前に選んだことが記されている。この二人については、
 それぞれ種彦の考証随筆に項目が立てられている。

まず、玉川千之丞については柳亭種彦『還魂紙料』下（文
 政九年（一八二六）刊、西村屋与八板）に「六 玉川千之丞」

と項目が立てられており、それによれば、

玉川千之丞は承応の頃より寛文の頃まで人に愛られしかぶきの女方なり京師の産にて寛文元年江戸にくんだり高安通といふ「また河内がよひといふもおなじ」かぶき大に流行て同狂言を三年せしとぞ野郎虫「明暦年間印本」に曰「村山座 玉川千之丞。面鉢藝いづくを難すべきやうなし女より好このまれ給ふこと五中將にもおとるまじ」

（中略）

西鶴大鑑「貞享四年印本」五の巻に云「七玉川のほか小哥の名所に千之丞がむかし風ふけば興津しら聲にて詠ひ出して家牀の御簾をあけての面影実の女井筒も何として是には立並ぶべき十四の春よりも都の舞臺をふみそめ四十二の大厄まで振袖着て一日も見物にあかれぬこと末の世の若女形これにあやかるべし河内通ひの狂言ばかり三年が間江戸の人をなびかせ猶ほめ草野郎虫にも此身の妻をあだには書ず云々」野郎虫□に見えたりほめ草末見又同作日本永代蔵「元禄元年印本」三の巻に「玉川千之丞女方して河内通ひの狂言一番を一日小判一両にさだめ一年三百六拾両づつ取ぬるも伊勢へ引こみ死るときはむかしの舞臺衣装も残らず」是等の冊子に河内通ひといふが則高安通也（以下略）

とある。『還魂紙料』では『河内通』と『高安通』は同義で

あり、また、さまざまな先行作品を引用しているが、『今業平』序文の通り、どの先行作品も「河内通で活躍した」という点が強調されている。

一方、右近源左衛門については柳亭種彦『柳亭筆記』¹⁶に「右近源左衛門」と項目が立てられており、それによれば、

【卜養狂歌集】「女かとみれば男なりけり業平の面影はむかし男なれば今見る事はなし當世はやりしうこん源左衛門おもしろの海道下りや何とかなるとつきせじとおもへば歌によみけり

又とよにあるものではない過去未来源左衛門が舞のなりふり

柳亭云、近年刊行なししうしに寛文元年市村竹之丞座へ右近源左衛門の下りし事を記せどたしかなる證なし此年中村座へ玉川千之丞下りしかば市村座へは此源左衛門が下りし歟

（中略）

【男色大鑑】「貞享四年印本西鶴作」六の巻「女方も昔右近左近が時は面影まぎらはしく頭は置手拭にして大かたは色作りしに諸見物もそのなりけりに請取仕組も今に見くらべて過にし事をかしかりき」

（中略）

【舞曲扇林】お郡かぶき云々といふ條に「其後大坂に餅業平大小の上手といひし日本傳助といふ狂言師是は竹島

幸左衛門の親なり」といふ事あり大和屋傳助日本傳助「又かぶき傳助ともいふ」は同人にて源左衛門が業平餅の狂言は源左衛門の師傳助よりつたへし狂言なりべし（以下略）

とある。省略した部分が多いが、玉川千之丞同様、「海道下りで活躍した」という点が強調されている。

この二人に関する記述から、玉川千之丞と右近源左衛門は同じ十七世紀中頃に狂言で活躍した歌舞伎の女形であること、そしてどちらも西鶴の浮世草子にも登場していることがわかる。その浮世草子『男色大鑑』や『日本永代蔵』での玉川千之丞に関する記述と『今業平』の玉川千之丞との間には共通点が認められず、主人公の設定という点においては仙果が西鶴の作品を『今業平』に利用したとは考えられない。やはり、それぞれが演じた狂言が関係していると考えられる。

『還魂紙料』には『古今役者物語』に掲載している『高安通』の詞章を引用している。

たかやすかよひ 一つろひやすき人心はなになれしは
 そもしさまさてつたなきはわらはが身にてと、めたりゆ
 へをいかにとたつぬるに君と我中ふたはの松のすゑかけ
 てかはらしとこそちきりしにいつのまにかはくたかや
 すにせる人有てふた道にしのひてかよひ給ひしをねたま
 しくはおもへ共さすがなさけもすてかたく色にはださて
 あけくれと三とせがあいたの物思ひひるは人めもつ、ま

しくよるそよとこにた、ひとりあこかる、むねのほむら
 をさますにそひさけの水はゆとなれとまださめやらぬ我
 思ひ君にうらみは有あけの月の入さもつれなくてなみた
 なからに立出てそなたの山はすさましくあくしよの有と
 きく物をおほつかなみのよるのみちとやあらんかくやわ
 たらせ給ふとそと思ひつ、けてかくはかり▲風吹はおき
 つしら波たつたやまよはにや君がひとりゆくらんとゆく
 糸を思ふ心とけよそのちきりをとめんとやあかぬは君の
 なさけとて打つれみすの内へそ入給ふ

この詞章は『伊勢物語』二十三段後半の男が妻を置いて他の女のところへ通うエピソードを踏まえている。しかし、武井協三は、『伊勢物語』では「妻の胸中に当然あつたはずの嫉妬心に触れるところがなく、これは、近世期には、模範的な貞女の話し」であるが、傍線部「むねのほむら」をさますにそひさけの水はゆとなれと…の表現が『大和物語』百四十九段の本文、

かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、
 かなまりに水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし
 いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、
 熱湯にたぎりぬれば…

に拠っていて、『大和物語』の妻は「熱い思いを冷まそうと、水を入れた金だらいを胸にあて」と「たちまち水は熱湯となつて沸き立ってしまう」ことから、『伊勢物語』とは正反

対の「激しい嫉妬心」を持つ女性として描かれ、『高安通』の女は『大和物語』の女性像を受け継いだと指摘した。

このように、男に待たされた結果、嫉妬心を露わにする女は『今業平』において若狭に見られる。例えば、『今業平』四編では若狭を一人萱津の宿に残して玉川千之丞と若党の智慧助、智慧助の許嫁の若松が芋川に出かけてから全く帰らないのにしびれを切らした若狭が芋川まで会いに行く。

（千之丞）「若狭でないか。」（若狭）「あい、ようもようもけにが日まで人を騙しておかしやんした。」と余程せいたる顔色なり。

千之丞を見つけた若狭は、若松が止めに入らなければいけないほどの勢いで千之丞を捕まえようとする（図1）。また、『今業平』五編では、千之丞が藤原という女性の一行が逃がした鳥を助けたお礼にご馳走になっていたところに、

若狭は駆けつけて、（若狭）「どこやらのお内儀さんと仲良さそうにお楽しみ、ゑゑ腹の立つ立つここへ来るな。」と怖い目で叱らしやんす（中略…千之丞は藤原といった理由を説明するが）（若狭）「合い口を言ふのは女の習ひ。珍しうござんすか。女を見るとそのやうな可愛い目元で迷はせてそのやうに安心な心に私もなつてみたい。主がおこはをくびなんすで私の胸が焼けます。」と腹立ち涙うち泣けば…

と、若狭は千之丞の襟元を掴んで藤原から引き離す（図2）。



若狭は『伊勢物語』の妻のようにじっと千之丞の帰りを待つ女性ではない。

一方、右近源左衛門の『海道下り』は、「狂言「若菜」の酒宴の場に登場する「こまの舞」で、「東海道を京都から不

【図1】『今業平』四編下（19ウー20オ）

【図2】『今業平』五編上（6ウー7オ）



破関まで下る情景を謡いこんだもの」（『新版 能・狂言事典』「海道下り」項）で、『業平餅』は、「在原業平が住吉の玉津島明神に参詣に行く途中茶屋で休み、亭主が席を立ったすき

に餅を盗み食う。やがて亭主が連れてきた娘を見て妻にと望むが、女が被衣（かすき）を取るとひどい醜女なので逃げ出す」（『日本国語大辞典』「業平餅」項）話であるが、これらの内容は『今業平』に全く見られない。

以上のことから、『今業平』の主人公を「右近源左衛門」ではなく、「玉川千之丞」に設定したのは、『今業平』の女性像と『高安通』の女性像が類似するためだと考えられる。

三 『今業平』口絵と本文における『好色一代男』の利用

次に、『今業平』が口絵と本文において『好色一代男』をいかに利用したのかについて考察する。

『今業平』三編上（嘉永四年（一八五二）刊）には芋川の場面を描いた口絵があり（図3）、傍線部の通り、本文としては四編に載せていて、それは「二代男にある筋を借用して八橋の條を點綴す」と、『好色一代男』の筋を使いながら『伊勢物語』の東下りを所々に取り入れたものであることを明かしている。

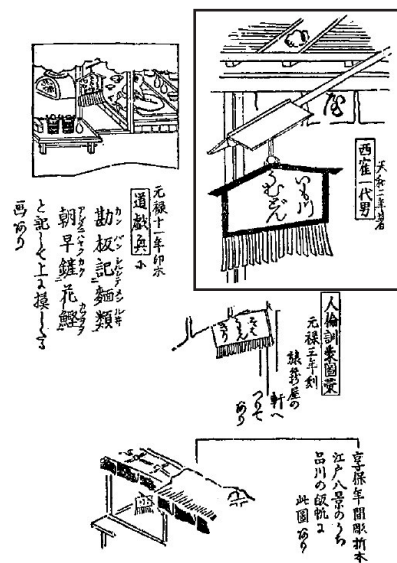
千之丞若黨智慧助商人となりて主君を養ふ

○三河國芋川里に千之丞平麵を鬻ぐ此叟次編に載す但勢語の面影にあらず一代男にある筋を借用して八橋の條



【図3】『今業平』三編上（2ウー3オ）

を點綴す
 千之丞 妾若狭
 玉河千之丞商人すがた
 智慧助妻若松



【図4】

【図3】に描かれている芋川とうどん屋に関しては種彦の考証随筆『用捨箱』（天保十二年（一八四二）刊、英文蔵ほか二肆板）に「十五」温飩の看板 芋川」と項目が立てられており、合わせて先行作品から芋川・うどん屋を描いた挿絵を載せている（図4）。

昔は温飩おこなはれて、温飩のかたはらに蕎麦きりを売、今は蕎麦きり盛になりて、其傍に温飩を売。（中略）看板に額あるひは楕形したる板へ、細くきりたる紙をつけたるを出ししが、今江戸には絶たり。寛政の初までは干鰯の看板に、彼楕形の板に青き紙にて縁などとりた

るを、軒へ掛たるがたままたまありし歟。（中略）又按るに、
 「一代男」二の巻に、前に模したる画を載たる条、二川
 といふ所に旅寝して云々ありて、「芋川といふ里に、若
 松昔の馴染ありて、人の住したる笹葺をつづり、所の名
 物ひら饅飩を手馴て」といふ事見え、（以下略）

引用している先行作品から芋川うどん屋は十七世紀後半の
 作品には見られること、看板には細い紙が付いていること、
 『今業平』刊行時には芋川うどん屋は既に無くなっていた
 ことがわかる。【図4】の中には『好色一代男』の挿絵の一
 部も掲載しており、その全体像は『好色一代男』巻二に見ら
 れ（図5）、【図3】と部分的に類似している。

しかし、『今業平』の本文は「一代男にある筋を假用して」
 いることから、口絵と違い『好色一代男』と完全に一致する
 ことはないと考えられる。まずは『今業平』本文において『好
 色一代男』をいかに利用したのかについて、それぞれの本文
 を比較して考察する。

『今業平』四編（嘉永五年（一八五二）刊）には、若狭若
 松の父親に会いに芋川のうどん屋へ行くというくだりがある。
 その序文にも

其業平に准へたる千之丞が温飩屋の食客とは本文に
 噂もなければざる蛇足と思ひながらも、是も彼一代男
 の芋川うどん二八の美人の種さを補ひたさの若狭若
 松

【図5】『好色一代男』巻二（16才）



とあるように、『好色一代男』から着想を得たと示している。
 この芋川の場面について、『好色一代男』巻二には、次の
 ようにある。

江戸大伝馬町三丁目に、絹綿の店ありける。「よろづ
 勘定聞くべし」とて、十八歳の十二月九日に京都を出て、
 （中略）

やうやう駿河の国江尻といふ所につきて、（中略）雨
 戸に尻ざしをして、寝るばかりに身ごしらへせし処へ、
 誰とはしらずに顔隠して、連ぶしに歌説経あはれに聞え
 て、今までは手枕さだかならず、目覚めて出立焼く女に、

「あれはいかなる人のうたひけるぞや」。「されば、この宿にわかさ、若松とて兄弟の女ありける。その貌、昼みせましたい。その女郎の口まねをして、あれは」と語る。（中略）世之介は左に若狭、右に若松を添い寝して「今中納言行平」というあだ名がついた。そして二人を身請けした。いつ音羽の山を見るまで、道すがらの遣ひがねとでもなくて、ふたりの女のうは着などをしろなし、芋川といふ里に若松むかしの馴染ありて、人の住みあらしたる笹葺をつづりて、所の名物とてひら饅飩を手馴れて、往來の駒とめて、「袖うちはらふ雪かと思れば」などとうたひ懸けて、火を焼く片手にも音じめの糸をはなさず。うか／＼とおとろひ、後はふたりの女も花園山のしも里に、まことの髪そりて世にすてられ、たのしみし人に捨てられ、道心とぞなれる。

江戸に行こうとして出発した世之介は、若狭若松姉妹を身請けしたことで京都に戻ることに、徐々に小遣いが減り、芋川に到着した時にその名物であるうどん屋を姉妹と開業し、店先で悠長に三味線を弾く。

一方、『今業平』四編では、智慧助が若松と許嫁であることを千之丞に明かした後、次のようにある。

（若松）「幼心に一生の夫と親に教へられ、心に誓ひしさをちやもの。何の忘れはおきませう。ととさんはみつ吉さんの知つての通り、石蔵とて名の通りの固い人なれ

ども、続く不幸せ、えんはいなもの近江を出でて後の住まひも三河の国、近江郡で池鯉鮒のこなた芋川といふところ（中略）

（千之丞）「互ひの真虚しからず、巡り合ひし奇縁を感じ、その日はここに逗留し、上でううりに暑さを払ひながらの鮎の煮びたしに五条川の鯉の刺し身賞鑑して、盃巡らし、その夜も宵よりうち臥したるに、いよいよ勝る若狭の恋慕不憫なれとも年季も長くこれを贖ふ小金もなし」。

（中略）母親に背いて若狭を妾にしたが、その若狭は）年若けれど、かくざまに上手を尽くし、人を迷はす手練れの女ならんなどと思へと、現在まとはりつきて離れぬには困り入り、真ならこと取り交へ、様々に言ひ拵へ、三河の国のわがさいしよ爺婆もあんなれば、小金を乞ひ得て遅くとも一ヶ月経ぬ間に我密かにきたつてそなたの身請けせん。ここに長居をしたりとて身の代はわき出でまじ。もしやもしやそくをたかへなば、三河へ来たつてかやうとも心任せにせらるべし。神懸けて偽りもかし。」と誓言立つるに若狭も是非なく念に念押し、受け引きければいささかの小金を費やし若松のみを自由にせさせ、次の日ここを立ち出でつ。若松若狭と兄弟のやうに人さへ思ひし二人。我のみ一人あがなはれ、男と共に国へ帰るは若狭の手前、いかにも辛く且つは別れも惜しけれど、返事も早く父親につかへたさが先に立ち、千之丞の後に

つき共に三河へ急ぎしを、その日の夕方芋川へ至りぬ。
（以下略）

若松が芋川にいる父親に会いたいと話すと、千之丞は若狭を身請けするためにもお金が必要であるため、自分も一緒に芋川に行けば、お金を用意することができるかもしれないと希望をもち、若狭を置いて三人で芋川に出かける。

『好色一代男』では芋川に若狭若松姉妹がいるが、『今業平』では若狭は芋川にいない。両作品で共通するのは、主人公の男が芋川でお金を工面するという点である。

また、若狭の女性像について、『好色一代男』では引用した巻二のごく一部にしか登場しないため、どのような女性であるかは明らかにされないが、『今業平』では、二節で指摘したように嫉妬心を露わにする女性で、五編の最後まで登場し、千之丞から離れまいとする。つまり、『好色一代男』の登場人物や場所を利用しながらも異なる展開に進む。仙果は考証随筆を利用しながら『今業平』に登場する人物を形成し、『好色一代男』を「翻案」つくりかへていったのである。

ここで再度口絵の内容に戻りたい。【図3】と【図5】に描かれたものを項目別に比較すると【表1】の通りである。

「①店名と看板」について、まず店名は『好色一代男』も『今業平』も同じ「若松屋」である。どちらも本文中には「若松屋」とは書かれておらず、挿絵と口絵からのみ得られる情報である。また、『用捨箱』に引用された部分には「若松屋」

の「屋」しか見られず、『好色一代男』の挿絵を確認しないと『今業平』でも「若松屋」とすることはできない。

「②三味線を弾く男」について、『好色一代男』では本文にも店先で三味線を弾く様子が書かれており、挿絵にも描かれていることが確認できる。しかし、『今業平』には本文中に千之丞が三味線を弾く様子は書かれていないにも関わらず、口絵では三味線を弾く千之丞が描かれている。

「③若狭・若松」について、『好色一代男』では、世之介が若狭若松姉妹を連れて行ったので、二人描いているのは当然であるが、『今業平』の本文では、若狭は萱津の宿で留守番をしており、芋川にはいないにも関わらず、口絵では若狭も芋川のうどん屋にいて働いている。

このように、②と③では『今業平』の口絵はその本文と一致していない一方で、『好色一代男』の挿絵と一致することから、『今業平』の本文と口絵において、『好色一代男』の利用の仕方が異なっていた。

ではなぜ、このような違いが生まれるのか。口絵が載った三編は嘉永四年（一八五一）に刊行され、翌年に四編が刊行された。若狭は三編の最後に登場し、四編以降、『今業平』の主要人物となる。読者は三編の最後に突如登場した若狭が口絵を見れば今後千之丞の妾となつて芋川に行くと思像するはずである。しかし、前述したように、口絵には「二代男いちだいをこにある筋すぢを假用かようして八橋やっはしの條でうを點綴てんてつす」とあり、仙果は芋川

①店名と看板	
 	『好色一代男』
	『今業平』

【表1】
 の話に入る前に『好色一代男』の筋を使いながら、『伊勢物語』の東下りを所々に取り入れると明かしたことで、読者が『今業平』の若狭が芋川に行かないことに疑問を抱くことを避け、むしろ『今業平』を読みながらどこに『伊勢物語』の要素があるのかを考えて読むことを求めたと考えられる。

③若狭・若松	②三味線を弾く男
 ※若狭と若松の区別は不可能	 世之介
 「智慧助妻若松」  「千之丞妾若松」	 玉川千之丞

『今業平』について、笠亭仙果の合巻における制作態度に

まとめ

ついで明らかにしたうえで、考証随筆と西鶴作品の利用という観点から『今業平』がどのように制作されたのかについて考察した。これについて、考証随筆についてはその研究の成果を利用し登場人物の設定に影響したこと、西鶴作品についてはその挿絵を『今業平』の口絵には変えずに利用しつつ、話の展開には異なりを見た。加えて、読者には話の展開が異なる方向に進むことを混乱させないように配慮されていることも確認できた。

最後に、仙果が序文で言及した「翻案〓つくりかへ」と「剽窃〓きりぬき」の違いについて考えてみたい。佐伯孝弘は、江島其磧が自身の浮世草子に西鶴作品の本文をそのまま取り入れていることを「剽窃」とした。その論で言えば、『今業平』は典拠を示しながらも本文をそのまま取り入れることもなく、典拠とは別の展開に進められる。それが「翻案〓つくりかへ」と「剽窃〓きりぬき」の違いだと考えられる。この問題については仙果以外の戯作者の作品も確認する必要があるだろう。今後の課題としたい。

【注】

- (1) 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：208-724
DOI: 10.11501/8942755・10.11501/8942756）
- (2) ここまで挙げた作品は鈴木健一著『伊勢物語の江戸——古典イメージの受容と創造』（森話社、二〇〇一年）を参照した。
- (3) 中村幸彦『中村幸彦著述集 第三巻 近世文芸贋稿』「八

古典と近世文学」1 伊勢物語と近世文学」（中央公論社、一九九〇年）ここで、中村幸彦は『風俗伊勢物語』初編の刊行年について「天保七年より」としているが、朝倉無聲撰『新修日本小説史年表』（春陽堂、一九二六年）では「天保六乙未年出版」項に「○風俗伊勢物語初編 四 東里山人 五雲亭貞秀」とあるため、本稿では後者を採用した。

- (4) 石川了「初代笠亭仙果——その著作活動——」（北海道大学国文学会編集『国語国文研究』第五十六号、一九七六年八月）

- (5) 石川了「初代笠亭仙果年譜稿——その一——」（『大妻女子大学文学部紀要』十一号、一九七九年三月）、同「初代笠亭仙果年譜稿——その二——」（『大妻女子大学文学部紀要』十二号、一九八〇年三月）

- (6) 注（4）に同じ。ここに、「仙果の合巻出版活動は、翌年の嘉永期に入って急速に活発化する。現在までの調査における合巻書名数（編数）を数えてみると、嘉永元年三（四）、同二年四（十）、同三年十（十九）、同四年十一（十八）、同五年十三（二十四）、同六年十三（二十九）となる。この数字が示すように、特に嘉永三年から急増しているが、このことについては、嘉永二年前後の頃に娘を同道して五度目の江戸行きをし、江戸において二人暮らしが始まっていることが原因の一つであろう。仙果が本格的に戯作活動を始めたのは、この年からとみるべきであろう。時に仙果四十七歳である」と指摘している。

- (7) 佐藤至子「草双紙と『戯作』」（『日本文学』第七十二巻第七号、二〇二三年七月）に、「A『東海道中膝栗毛』『花暦八笑人』のような作品こそ戯作というに相応しい。B怪談や人情本にふざけたところはなく、最近の合巻にも滑稽な作品はないが、戯作の「戯」

についてあれこれ言う人はいない。C 戯作が文学研究の合間の気散じに遊びで作ることを意味するとすれば、作品のあり方についての語ではない。A は戯作を滑稽な作品、つまり作品のあり方を示す語として捉えるものである。B は戯作を怪談・人情本・合巻などを含むジャンルとして捉えるもの、C は執筆態度を指す語として捉えるものである。（略）仙果の記述はまさに、戯作が制作過程と作品、そして作品群をも指す語であることを裏付けるものと言えよう。」とある。

- (8) 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：207-1252 DOI: 10.11501/10301653）
- (9) 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：207-1249 DOI: 10.11501/10303830）
- (10) 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：208-731 DOI: 10.11501/8943109）
- (11) 龍谷大学図書館貴重資料画像データベース（請求番号：5923-2-V-2）
- (12) 長田和也『異本洞房語園』受容とその周辺（『国文学研究』百九十三号、二〇一二年三月）
- (13) 暉峻康隆・野間光辰編著『国語国文学研究史大成11 西鶴』「研究史通観」二「文化・文政期における西鶴の復古」（三省堂、一九六四年）
- (14) 竹野静雄「近世随筆類の西鶴観——その言説の意義と系譜について——」（『山口県立大学国際文化学部紀要』三号、一九九七年三月）
- (15) 木村三四吾『木村三四吾著作集IV 資料篇 藝文余韻——江戸の書物』（八木書店、二〇〇〇年）
- (16) 『百家説林 続編下二』（吉川弘文館、一九六四年）『柳亭筆記』の成立年は未詳だが、本文中に『用捨箱』の名が出るため、天保十二年（一八四一）以降に成立した随筆である。
- (17) 武井協三「歌舞伎とはいかなる演劇か」『第二部 初期歌舞伎の諸相』第五章 うわなる開山 玉川千之丞——「河内通」とその演技」（八木書店、二〇一七年）
- (18) 高橋正治校注・訳『大和物語』（『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館、二〇〇六年）
- (19) 武井協三「若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究」『第二部 役者と演技』第一章 女方の祖 右近源左衛門」（八木書店、二〇〇〇年）
- (20) 『日本随筆大成（第一期）13』（吉川弘文館、一九七五年）
- (21) 井原西鶴『好色一代男』早稲田大学図書館所蔵、請求番号：く13 01607
- (22) 暉峻康隆校注・訳『好色一代男』（『新編日本古典文学全集66 井原西鶴集①』（小学館、二〇〇六年）
- (23) 杉本紀子「世之介の旅」——「好色一代男」巻二の五「旅のでき心」を中心に——（『学芸国語国文学』第二十六号、一九九四年三月）ここに、「この章で描かれる世之介の「旅」はこの章のなかでは到着点を持たない。江戸は最初の目的地ではあったが、結局本章のなかでは途中で目的地ではなくなり、江戸行きの旅は「若狭若松」を連れての西へゆく旅、つまり都へのほる旅へと転換しそれとて結末部に至っても目的地につくことなく、この章は終わってしまう。（中略）世之介の行方は（若狭若松の行方もそうであるが）、結末部で全く描かれない……」とある。

(24) 佐伯孝弘「其磧氣質物の方法——西鶴剽窃の意図——」（『日本文学』三十八卷八号、一九八九年八月）

付記

本稿は令和五年度京都近世小説研究会十一月例会（十一月四日、オンライン開催）における口頭発表に基づいたものです。質疑応答時にご質問、ご教示を賜りました先生方に御礼申し上げます。また、資料の掲載をご許可くださった早稲田大学図書館に厚く御礼申し上げます。

（ひぐち・じゅんこ 本学大学院博士後期課程）